Peshawar-kai
ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

号外
2009年5月27日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙写真　用水路（手前）によって砂漠化していた大地が緑の田畑に蘇ったスランプール（2009年4月）。向かいに見えるのはパキスタンとの国境を隔てるスレイマン山脈

灌漑用水路完成間近特別号（号外）

ここにこそ動かぬ平和がある	中村　哲
多くのアフガン人と自分は仕事をしてきた	松永貴明
中村先生の両手は花で溢れていた	村井光義
四年ぶりの訪問――言葉を超えた感動に包まれ	村上　優

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

5月11日、マドラサの体験入学式。子供たちにもらった花束を手にする中村医師

D沈砂池の柳も繁る。左手クナール河につき出した石出し水制

取水口水門。洪水に幾度も耐えた

砂漠化していたK池付近にも麦畑が甦った

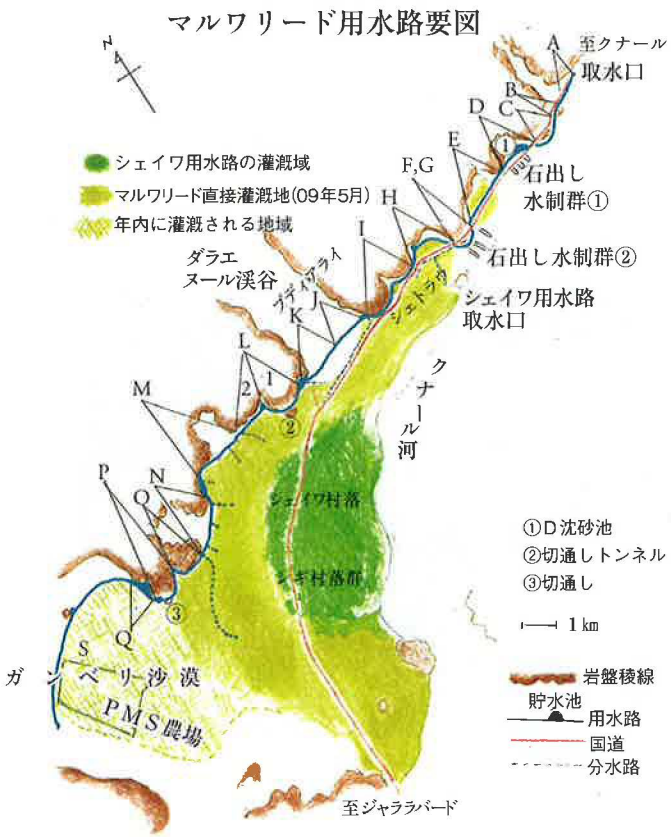
難工事のG岩盤は、階段状の盛土をして水路を通した。地盤の軟化を柳が防ぐ

岩盤まわりの難工事Ｑ１池

建築中のモスク（左）とマドラサの遠望

用水路最大のＱ２貯水池

600人以上が学べるマドラサ



ガンベリ砂漠に植えられたガズの砂防林

自立定着村の境界壁（ガンベリ）

ここにこそ動かぬ平和がある

――用水路は現地活動25年の記念碑――

どんな人間でも、自分が育った宇宙がある。それは、善悪や美醜のものさしを提供するだけではない。同時に、人知が超えてはならぬ神聖な普遍性を戴いている。「どんな悪人でも許され、どんな善人でも裁かれる」という逆説的な自然の事実が隠されている。それ故にこそ、人はその前で謙虚になり、自由を感じ、人間らしい感性を保つことができる。用水路はまさに、地域はもちろん、これを支える日本側の人々の謙虚な祈りにも支えられて、実現したのである。

PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長　中村 哲

五月、ガンベリ沙漠に酷暑の夏が到来した。めまいを起こすような強烈な陽射しにあぶられ、目つぶしの砂嵐に吹かれながらも、黙々と作業する一団がある。作業員六六〇名、職員六〇名、ダンプカー二五台、掘削機八台、ローダー六台、トラクター二〇台が広大な沙漠の中でうごめく。その様は、さながら巣作りに励むアリの群である。

ガンベリ沙漠はアフガニスタン東部のジャララバードから十五キロメートル北にあり、その幅四キロメートル、長さ二〇キロメートル、ニングラハルとラグマンとの州境に当たる。厳しい自然条件のために交通路としては不向きで、古来多くの旅人たちを葬ってきた。この沙漠が、六年前着工したPMS（ペシャワール会医療サービス）のマルワリード用水路の終点である。現地のことわざに、「ガンベリのように喉が渇く」と云われるほど、乾燥した荒地として有名だ。初めの頃、ここが緑の楽園になるとは誰も信じなかった。だが、この六年間、用水路は、難工事を重ねながら全長二〇キロメートルまでを完成、約二五〇〇ヘクタール以上が潤されて緑を回復した。残る四キロメートルが、このガンベリ沙漠沿いの岩盤地帯と沙漠横断路である。この完成が目前に迫っている。

工事は昨年十一月から続けられていたが、予想以上の難所となった。沙漠の熱風はアフガン人にとっても尋常ではない。「夏前までに完成」が合言葉だったのに、これまでの工事の後始末、マドラサ建設、他の取水口の建設、湿地帯処理、地方政府や米軍・軍閥との折衝、例年にない雨天続きなどで、大幅に遅れていた。「夏は働けない」と皆思ったが、この機を逃しては仕上がらない。気力と希望にすがりながらの挑戦となった。

難行を極めた岩盤まわりの工事

建設のいきさつ

PMSの「マルワリード用水路」が実行に

移されたのは、二〇〇三年三月十九日、米軍のイラク侵攻の前日であった。当時、ジャララバード周辺は空前の規模で農村の沙漠化が進行していた。かつてこの一帯はアフガン東部で豊かな穀倉地帯として聞こえていたが、一九九九年から旱魃が次第にひどくなり、廃村が広がっていった。農民たちは続々と村を離れ、多くはパキスタン北西辺境州へ難民として流れていった。折悪しく前後して、旧タリバン政権と英米との衝突が起きた。一九九八年、ジャララバードは米国の巡航ミサイルの攻撃にさらされ、二〇〇一年に「ニューヨーク・同時多発テロ」が起きると直ちに激しい空爆にさらされた。その後の政治的混乱は激しくなるばかりで出口が見えないが、世界の耳目は徒に政情に集中し、人々の本当の困窮は伝わることがなかった。

クナール河の取水口と斜め堰

アフガン人の大半が自給自足の農民である。米軍の進駐に続いて「アフガン復興」が話題となったが、農村地帯が恩恵に浴することは少なかった。PMSは既に二〇〇〇年から医療だけでなく、飲料水源（井戸・カレーズ）の確保にのりだしていたが、飢餓と難民化が後を絶たぬ状態で、より抜本的な「農村復興事業」へと傾斜していった。用水路計画が始まったのは自然な成り行きであったのかもしれない。当時、誰も手をつけなかったからである。

参考とした筑後川（福岡県）の山田堰

適正技術の習得――人と自然との間

初め、手さぐりの時期が続いた。一介の医師にとって、農業土木の分野は余りに縁遠いものであった。また、仮に現代日本の技術を駆使できても、現在の用水路ができたかどうか疑問である。単純な手作業を多くもりこみ、現地で維持補修が可能なものでなければならない。このヒントを与えてくれたのは、現地と日本の古い水利施設であった。両者の類似点は、当然のことながら機械を使わず、人力に頼る方法である。

特に、直に自然と向き合う河川からの取水技術、自然の猛威から身を守る術である。このため、河床の堰上げ、護岸、土石流・鉄砲水対策、防風対策など、自然との格闘に明け暮れる中、基本的考えは昔のものを踏襲することになった。意図的に真似たのではなく、限られた技術力と物量の中で、どうあがいても、それ以外の方法をとれなかったのである。取水堰は福岡県の筑後川沿いにある山田堰がモデルとなり、改良を年々加えてPMS独自の方法が確立された。護岸法では蛇籠工法や石出し水制を駆使して洪水・決壊被害を乗り切った。貯水池も自宅

用水路の概要

水路の名称	マルワリード用水路（Marwarid Canal, Marwarid　はペルシャ語で「真珠」の意）
全長	約23.6km　（第一期；13.0km、第二期；10.6 km）
場所	アフガニスタン国クナール州ジャリババからナンガルハル州シェイワ郡ブディアライ村を経て、同郡シギ村ガンベリ沙漠まで
平均傾斜	0.00073
標高差（落差）	17.2m（ジャリババ取水口633.5 m, ブディアライ村624.4 m, ガンベリ砂漠末端616.3 m）
取水量	4.5～5.5 ㎥/sec.（限界最大量6.0 ㎥）
推定損失水量	45%　（浸透損失20%、無効水25%）
灌漑給水能力	3.0～4.5 ㎥/sec.（一日25～40万トン）
推定灌漑可能面積	約9,700ヘクタール（約9,700町歩） *既に灌漑している耕地と給水量から算出。土壌の保水性、作付けの相違で、日本の基準とは必ずしも一致しない。
水路沿い植樹総数	200,380本（2009年1月現在）、うち第一期126,150本，第二期74,230本
設計･施工者	ＰＭＳ（ペシャワール会医療サービス）
工期	第一期工事；（竣工）2003年3月19日～2007年4月30日、第二期工事；（建設中）2007年5月1日～2009年6月15日予定

＊2008年1月1日～2009年5月17日の実績を示す。詳細は次号（100号）に掲載。

近辺の堤（つつみ）を模倣したものである。もちろん、石や土の性状、地形を考慮し、かなり計算されたものであるが、結論は吾々の知恵は古人に及ばないということであった。完成しつつある吾がマルワリード用水路は、日本人の御先祖さまに負うところが大きい、と告白せねばならない。

六年をふりかえると、自然は決して過剰な要求をしない。「過酷な自然」とは、人間側が欲望の分だけ言うのであって、自然を意のままに操作しようとする昨今の風潮は思いあがりである。インダス河の支流、クナール河は簡単に制御できるものではない。殊に取水口の建設は、人為と自然の危うい接点であり、「少しばかりお恵み下さい」という姿勢がなければとても成功するものではなかった。「遊水地」や護岸法の着想もそうで、古人は自然を制御するのではなく、同居する知恵を生かしたのである。

人里を守る

二四キロメートルの水路は、単に水を送って三〇〇〇町歩の農地を確保しているだけではない。水路自身が山麓地帯の人里の守り役になっている。水路は、ヒンズークッシュ山脈の支脈・ケシュマンド山系の南麓を岩盤沿いに走る。当然多数の谷を横切り、崖地沿いに建設される。それは、とりもなおさず、二四キロメートル全域にわたって上流の降雨を引き受けねばならぬということである。アフガニスタンの茶褐色の山肌は、殆んど植生がなく、保水性に乏しい。乾燥地といえども、きまぐれな集中豪雨の規模は甚だ大きいもので、ごく短時間に襲う鉄砲水にしばしば泣かされた。

しかし、吾々が泣く分だけ、人里は安泰になる。かつては脅威であった鉄砲水や洪水が、ことごとく水路内に流れ込むからだ。そこで途中から着想を変え、岩盤沿いや小さな谷程度の雨水は積極的に水路内にとりこむ設計となった。もちろんダラエヌールなど超弩（ちょうど）級の

蛇籠で護岸した用水路。17万本以上の柳を植樹

谷はサイフォンでくぐらせるが、大抵はとりこむ。貯水池がやたらに多く、全体にゆとりのある幅をとっているのは、このためである。また土石流の谷では植林に努め、猛烈な勢いで下る流水の速度を落とそうとした。ガンベリ沙漠では日本の海岸と同じように、五キロメートルにわたる防風・防砂林を造成した。

水路が守るのは洪水ばかりでなく、里の人間関係がある。例えば、水争いで殺傷沙汰が絶えなかった村同士の歴史的な和解も、マルワリード用水路によってもたらされた。「衣食足って礼節を知る」というのは本当である。

通水前のK池（2007年3月）

また、作業員は全て近隣農民であったから、彼らに落ちる日当もバカにはならない。この六年間で延べ五五万人が作業に従事した。シェイワ郡では作業に携わらなかった壮青年を捜す方が難しいと言われる。不幸にして水路の恩恵に浴さなかった村では、賃金収入で生活が保障されてきた例もある。こういった村では、作業員が半ば熟練工となっていて、蛇籠（かご）の制作、鉄筋の裁断、水路やマドラサ建設に欠かせぬ人員を補給し続けてきた。その経験を生かして他地域に出稼ぎに行ける者もいる。「用水路事業がないととっくの昔に難民化していた」と口をそろえる。

通水後のK池と甦った田畑（2009年3月）

百姓が作った水路

取り込まれた水は、用水路を通して人里を潤す。この用水路の大半が蛇籠工と柳枝（りゅうし）工で成り立っており、土、石、木が主な要素である。伝統技術に負うところが大きいと先に述べたが、当然、作業員であるアフガン農民が日常から身につけている技術が活躍した。掘削機などの機械力は入っているが、最終仕上げは必ず手作業に拠った。特に石垣や蛇籠組みなど、石を扱う仕事はそうである。彼らは有能な石工でもあるのだ。また、水は農民にとって生命線でもあるから、その観察力は侮れない。理屈を言っても彼らは信用せず、ただ「本当に水が来た」という事実だけが説得力を持つ。灌漑事業とは、農耕と同じく、徹底した経験実学である。

初めの頃居た「技術者」と自称するものは全て去り、残るは近隣農民、教師、ムッラー、医療関係などの職員であった。彼らが現場監督として年ごとに経験を重ね、「自覚しない技術者」として、指示された工程を一枚の「絵図面」で理解し、忠実に施工できるようになった。「エンジニアなしに、百姓である自分たちが造った」というのが作業員や職員たちの誇りになっている。PMSが自信を持って「将来の水路保全」を述べるとき、彼ら

がいつでも速やかに動けるという経験、人々の水路への愛着が背後にあるからだ。

マドラサと自立定着村の建設

マルワリード用水路建設事業は、全長二四キロメートルの完成を以って、一つの区切りとなる。しかし、これは吾々の事業の終わりではない。「出産が終わる」と述べるのが正確である。現在、この用水路によって生活を立てる者は十五万人を下らない。更に増え続けるだろう。

ＰＭＳが着手したマドラサ建設と、自立定着村そのものが、私たちの願いを象徴している。マドラサはアフガン人の生きる土俵を提供する伝統や文化の要である。地域の人々が生きる精神的なよりどころなしに、単に「生存する」ということは絵空事に近い。どんな人間でも、自分が育った宇宙がある。それは、善悪や美醜のものさしを提供するだけではない。同時に、人知が超えてはならぬ神聖な普遍性を戴いている。「どんな悪人でも許され、どんな善人でも裁かれる」という逆説的な自然の事実が隠されている。それ故にこそ、人はその前で謙虚になり、自由を感じ、人間らしい感性を保つことができる。用水路はまさに、地域はもちろん、これを支える日本側の人々の謙虚な祈りにも支えられて、実現したのである。

かつて日本でも、大きな水路事業が完成したとき、必ず祠（ほこら）を設け、天の恵みに感謝し、無事を祈願した。日本とアフガニスタン、自分はこの二つの異なる世界の間で、一つの輝きを垣間見た気がする。確かに血なまぐさい出来事や、利害の絡むどろどろした争いも絶えなかったが、それは決してこの輝きを損なうものではない。

自立定着村の方は、やがて潤されるガンベリ沙漠の開墾地（約二〇〇ヘクタール）に設けられる。用水路建設に携わった農民や職員を自活させ、かつ経験を生かして水路維持を子々孫々まで行われるようにするためだ。また、これまでの「ダラエヌール試験農場」を継ぐものでもあり、ここに医療から出発し農業生産活動に至った、私たちのひとつの帰結点がある。人は自然の一部であり、自然を離れては生きてゆけない。

以上のように、「協力事業」といっても、吾々は他人さまを「助けてやる」ために水路事業を行ったのではない。また、別に何かの思想や信念があったわけではない。そこで自分たちをも支える何かを見出したからである。その何かを語ることはやめよう。それは、言葉を刻みだした瞬間から人為の加工品であることを免れぬ何ものかだからである。

ともあれ、マルワリード用水路は、現地活動二五年の「記念碑」だと言える。そこに込められた様々な思いと出来事をつづるのは自分の能力を超える。ただ、この命の流れが、絶えることなく続き、建設にかかわった全ての人々に心和むものを与えることを祈る。変転する殺伐な世界にあって、ここにこそ動かぬ平和がある。

中村哲
九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院ＰＭＳをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千五百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約七万人（二〇〇八年度）。

◎ワーカー通信

多くのアフガン人と自分は仕事をしてきた

PMS事務担当　松永貴明

共に汗を流した仲間

帰国を二日後にひかえた五月十七日、水路やマドラサの現場を見て回った。前回、滞在したときに、これが最後になるだろうと思っていたが、性懲りもなくまた現地に来てしまって、一ヶ月が経とうとしている。この一ヶ月間、ジャララバードの事務所での仕事で現場に出る機会がほとんどなかった。

だから、最後に現場を見ておこうと思った。そして、一緒に働いてきた人たちに別れを告げなければとも。

現場は以前と変わりなく、炎天下の暑さにも負けず、みんなせっせと働いていた。モスクの壁にモルタルを塗る左官たち。マドラサの屋根に土を敷く作業員。教室の窓枠を取り付ける大工。水路沿いの柳や桑の木に水やりをする植樹チーム。手ごろな石をトラクターの荷台に積んで作業地に運ぶ採石チーム。運ばれた石を丁寧に積んで蛇籠を組み立てる熟練作業員たち。水門を取り付けている構造物チーム。盛り土をシャベルでならして水路の底を造成している作業員。Jakagoワークショップで針金を金網に編んでいる蛇籠職人。コンクリート構造物に必要な鉄筋を切ったり曲げたりする鉄筋加工チーム。まだまだ他にも、ダンプトラックやエクスカベーター（油圧ショベル）などの重機を運転するドライバー。それを誘導したり指示したりするエンジニアたち。各現場に冷たい井戸水や休憩時間のチャイを運ぶスタッフ。現場基地に待機して無線で現場と連絡を取り資材の手配などを行う事務スタッフ。

ホントに多くのアフガン人たちと自分は仕事をしてきたんだと実感した。昨年の今ごろは自分もそこにいて、共に汗を流していた。でも、今回は現場を見られる最後の機会と思い、ここに来た。そう思うと寂しさを感じる。

日本人ワーカーの遺したもの

現場で働く彼らと話すと、日本人の名前がよく出てくる。

「ホンダはどうした。あいつは来ないのか？」

「コンドーのナンバー知らないか？　電話したいんだ」

「フジサワはもう来ないのか？　樹が大きくなったから見せたいんだが」

「オレはヤマグチと仕事していたんだ。いまあいつはどこにいるんだ？」

「シンドーは来てないのか？　オレは彼と仕事がしたいんだ」

「これを見てくれ。軍手がボロボロだ。ササキに言って持ってこさせてくれ」

「オニキ・サーブにまた来てくれと伝えてくれ」

日本人ワーカーが現場に来なくなって半年以上が経つ。それでも彼らはまた日本人が戻ってくることを、また一緒に働けることを信じている。

いつかまた

結局、別れのあいさつができたのは一部のエンジニアだけだった。仕事中の作業員たち一人ひとりにはさすがに難しかった。別れを告げることのできたエンジニアの一人が言ってきた。

「なにか自分に出来ることはないか？」

「ドクター・サーブの手助けを」と、答えると、

「そんなの毎日やってるよ。こんなに仕事してるんだから」と、笑いながら返された。

最後に、「できることならまた戻って来てくれ」という旨のことを長々と遠まわしに言われた。どう答えようもなく、抱擁と握手を交わし別れた。目頭が熱くなった。

水路は最終地点のあるガンベリ沙漠を横断し始めていた。そこに水が流れるのは間近だ。水が来ると、この沙漠のこの一帯が緑に覆われる。H地区のスランプール平野やJ、K地区のブディアライ下流地域の荒地が田畑に変わっていったのを自分はこの五年間で見てきた。

このガンベリ沙漠もそうなる。一年後か、二年後か。そう確信する。だから、いつかまたここに必ず戻ってきたいと思う。緑に覆われたこの地を見るために。

中村先生の両手は花で溢れていた

PMS事務担当　村井光義

体験入学

五月十一日、マドラサの体験入学が行われた。正式な開校はこちらの夏休みが明け、校舎の内装工事が終わる九月頃の予定だが、子ども達が待ちわびているのでお披露目することになったのだ。十二学年全十二クラスでは一日限りの授業があり、中村先生はその全ての学級を訪れ生徒達に短いあいさつをされた。恥ずかしそうに中村先生へ花を渡す男の子（ここには花屋はない。この花は近くで摘んできたもので、根には土も付いていた）。ジュースを渡す男の子。それを見ていた学校の先生やPMS職員のとても嬉しそうで朗らかな表情。これらの場面を、ビデオカメラで記録に残す日本人ワーカー松永さんのニコニコした顔。子どもたちは、「なんで今日一日だけなの？」と言っていた。

日々営まれる生活

この半年、私は現地を離れ日本で過ごした。新聞やテレビを見ると『自爆テロで〇〇人が死亡、米軍空爆により〇〇人が死亡、銃撃戦により国軍、米軍、武装勢力双方に多数の死者』等々、空爆、銃撃戦による死しか報道されず、それさえ人の死と言うよりも、数としてしか扱われない。その出来事は家族、友達、周りの人をひたすら悲しくする非常に辛いものであるにも拘らず。そして、このような情報ばかり聞いていると、ソビエト侵攻、軍閥同士の内戦、アメリカ軍を主力とする国際部隊の展開、大旱魃などの状況下で生きている人々の存在を忘れてしまう。日本を出発する前、いつもより不安があった。私の頭は負のイメージでいっぱいだったからだ。しかし実際には、家族を養うために仕事に精を出す男たち、家を守る女たち、親の手伝いをする子どもたち、アフガニスタンには以前と変わらない日々営まれる生活があり、それは日本と同じである。私はそれを忘れかけていた。世にある情報はごく一部で、当り前の日常が隠れてしまう。様々な立場があれば、一つの事実でも見え方が違ってくる。報道ではマドラサはテロリストの温床と伝えられている。

マドラサは宗教だけでなく、国語、数学、理科、社会の授業もある。貧しい家庭の子が多く、孤児も受け入れる。日本人宿舎の世話人ママジャンは、自分の子どもが通うこともないのにマドラサができることをとても喜んでいる。外国から一時的にやって来た者にはこの感覚は分からないが、今残っている慣習には、今まで淘汰される中で残ってきた理由があるのだろう。

職員を率い、事務所の空いた土地を耕し野菜畑にした副院長。車を運転するより楽しそうに農作業する運転手。頭と耳の隙間に、鉛筆代わりに花を挟む事務職員。手入れの行き届いた庭を自慢する門衛。自然とともに、水とともに生きる農民がなぜ殺し合わなければいけないのか。私がここで接した人は誰も戦争を望んでいない。

中村先生の「学校ができて嬉しいか？」という問いに、子どもたちは「嬉しいー!!」と声を揃えて答えた。花を渡すために先生を取り囲んだ子どもたち。あいさつが終わった頃、中村先生の両手は花で溢れていた。

四年ぶりの訪問
――言葉を超えた感動に包まれ

ペシャワール会副会長　村上　優

六年の歳月を費やした水路事業の完成を目前にし、マドラサの開校を祝うということで四年ぶりにアフガニスタンを訪問した。二〇〇二年にダラエヌールを訪問した時のことが思い出される。千本ほどの生活用水の井戸を掘り、灌漑用井戸第一号が完成し、修理したカレーズからの水も加えて緑が回復してきていた。しかしダラエヌールの下流域のブディアライは畑の痕跡はかすかに残っているが巨石がゴロゴロし、まったくの荒野に見えた。ダラエピーチやワマを訪れるためにクナール河沿いを北へ走っても周囲は岩石砂漠で、よく見ると畑跡と見えなくもない荒野が続いた。

伊藤和也さんのご家族から預かったメッセージと伊藤さんが受賞されたシチズン・オブ・ザ・イヤーの時計。時計はダラエヌールの診療所に掛けられる

用水路の工事が始まって最後に訪問したのは〇五年春で、当時は取水口が完成しスランプール（E地点の近く）まで水路が来て、初めて畑に通水をした時で、住民の喜びようや活気は記憶にある。水路の柳がその前年に訪れた時よりは大きくはなっているが、一面に麦が実っているというわけでなく、まだ土木工事の現場そのものであった。

そして今回の訪問。水路の両脇の柳はすでに古木の風格があるほど大きくなり、緑の線が延々と続き、その両脇一帯に麦畑が大きく広がり、水が来た地域から農地が広がり、新しい家ができ、この地で普通の生活が営まれている。カマやベスード用水路などの取水口を修理して使用可能にしたものを含めて、人口四〇万人以上の人々が生活を行うことができる耕地が広がっていると聞いた。村には子供が増え、水路の遊水地には人々が集い、遊び、祈り、オリーブやプラムやアンズが小さくも果実をならし、この地に戦禍が襲っているとは感じられない長閑（のどか）さがある。水路は二四キロ続く緑の線をなし、福岡市を縦断する距離ではないだろうか。水路本体より分枝の水路ができて水をめぐらし、家庭菜園を作っている様は平和そのものである。昔からこうであったように畑があり、土で作った家々が自然の風景に溶け込んでいる。医療より始まった活動が、新しい村作り（自立定着村）、試験農業、水源活用した養魚、水路工事技術を広く蓄積し、学校（マドラサ）やモスクなど精神性にかかわるもの、生活のすべてに広がっている。植樹した柳、クワ、ユーカリ、ガズ（糸杉のような木）、オリーブや他の果樹は数十万本を超えている。どれ一つとっても感動的なことである。今回の訪問で言葉を超えた感動が私を包み、写真では伝わらない生の息吹を感じさせてもらった。本当に沢山のことを成し遂げてきた人々を思い浮かべ、人の素晴らしさに感動するのみである。

しかし一方で移動には武装した国軍のセキュリティや警察官が同行し、慎重な行動や、頻繁に飛び交う攻撃用ヘリ、不気味な無人探査機など、戦争と直結する出来事も眼前にあり、この地域の実情を理解する困難さがある。点と闇の中での戦争が起こっていると表現するのが妥当かもしれない。住民の生活は水路とその関連事業で着実に豊かになっていることは確かである。それと同時にこの地で多くの人々が犠牲になっていることも肝に銘じるべきで、私たちも伊藤和也君を失った。今回は伊藤和也君の家族より托された時計や文具、メッセージを手渡すこともできた。

中村哲医師の表現では、難産ではあったがアフガン人と日本人が協力して、この地域に新しく子供（地域）が生まれた。これからはこの子供を育て、見守ることが必要だと感じた。四年ぶりの訪問を支えていただいた人々に感謝したい。

●事務局便り

＊ペシャワール会始まって以来二度目の「号外」を出すことになった。今回は中村医師のたっての希望でもある。

現地の中村医師と四月のある日電話を交わしていた時「号外を出せないか」との二言に私は、「先生、九九号が出たばかしで、六月末には一〇〇号も出ますよ」とにべもなく答えていた。しかしその日の夜中にふと目が覚めると、ある思いに撃たれるように気づかされた。

二〇〇三年三月に始まった灌漑用水路工事が、六年数カ月をかけて完成しようとしている。現地のスタッフ一同完成に向けて一丸となっている。中村医師からのメールによる進行報告は、ほぼ毎日届き始めていた。こんな頻繁な通信はこれまでなかったことである。事務局はこの日々の報告をわくわくしながら待ち受けていた。「号外を出したい」というのは、これまで支えて下さった会員のみなさんにも、この現地の空気を一刻も早く共有して欲しいという、中村医師の溢れる思いだと気づいたのである。まことに迂闊なことであった。

用水路建設は、徒手空拳の出発だった。一人の医師が、土木工学を独学で学び、設計はもちろん現場での指揮に止まらず自ら重機を運転しての獅子奮迅の闘いだった。もちろん中村医師一人の闘いではない。馳せ参じた数十人の無名の日本人青年たち、汗と埃にまみれて作業した延べ数十万人のアフガン人。それを支え続けた数万の日本側の会員や共感者たち。これまでかかった十五億円ほどのお金も、会費と寄付のみで賄われた。どれ一つが欠けても成就できなかった事業だ。

この春から、松永、村井の二人の青年が現地に短期赴任している。現地の事業はおおむね順調だが、会計事務に現地が不安を持っていた。しかし現地の治安は悪化し続けている。派遣を渋る私のもとに、二人は直訴してきた。「君らに何かあれば、現地事業が保たない」という私に、「現地事業が自分達を必要とする限り行かせてくれ」と訴えた。これは自己責任などという問題ではない。彼らも私も現地に対して責任を負っているのだ。

この事業に関わった者で、志を高く掲げたものは一人としていなかった。あえていえば、志を深く秘めた者達の日々の積み重ねがあっただけだといえる。中村医師は言う。「まだ出産が終わったばかりだ」

●中村医師の帰国延期

用水路工事の完成が目前であることと集中豪雨による工期の遅れで、帰国延期になりました。したがって、総会は中村医師不在で行います。講演を予定されていた方々には大変御迷惑をお掛け致しますが、深くお詫びすると共に、事情ご理解いただきますようお願いいたします。

アフガニスタンの大地とともに【新刊】
伊藤和也 遺稿・追悼文集
アフガニスタンの復興を、その深きこころで願い続けた伊藤ワーカーの遺した足跡
A5判並製260頁 カラー90頁 1575円

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 【3刷】1890円

丸腰のボランティア
すべて現場から学んだ
中村哲編 【2刷】1890円

空爆と「復興」【2刷】1890円

辺境で診る 辺境から見る 【3刷】1890円

ダラエ・ヌールへの道 【3刷】2100円

医者 井戸を掘る 【10刷】1890円

医は国境を越えて 【6刷】2100円

ペシャワールにて 【8刷】1890円

聖愚者の物語 甲斐大策 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 電話092(714)4838
価格はすべて税込価格(税5%)です

会則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2009年5月27日　号外　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲　名誉会長　高松勇雄